

行政調査報告書

- 兵庫県庁
- 兵庫県立はりま姫路総合医療センター
- 兵庫県立大学 先端医療工学研究所
- 兵庫県立淡路島公園 ニジゲンノモリ

令和4年 11 月 29日（火）～30日（水）

大阪維新の会大阪府議会議員団

◇視察の目的

■1 日目（兵庫県庁）

兵庫県では、21 世紀の成熟社会を真に豊かな社会とするため「ユニバーサル社会」の社会像をすべての人が共有できるものとして、ユニバーサル社会づくりの推進に関する条例（平成 30 年 4 月 1 日施行）に基づき、『年齢、性別、障害の有無、文化などの違いにかかわらずだれもが地域社会の一員として支え合うなかで安心して暮らし、一人ひとりが持てる力を発揮して元気に活動できる社会』の実現をめざしている。また、その取組みの一つとして、障がい者等が農業分野で活躍することを通じ、自信や生きがいを持って社会参画を実現していく『農福連携』を実施している。

2025 年大阪・関西万博も見据え、誰もが暮らしやすく、訪れやすく、誰もが活躍できるユニバーサルな社会づくりの実現に向けた取組みの参考として、「ユニバーサル社会づくりの推進に関する条例」の背景・目的や本条例における取組み、農福連携に関する福祉分野での取組みと課題、今後の取組み等視察することとした。

また、府議会より優れている事項や相違事項を今後の議会改革の参考とするため、議場施設の視察を行った。

■2 日目（兵庫県立はりま姫路総合医療センター、兵庫県立大学 先端医療工学研究所、兵庫県立淡路島公園 ニジゲンノモリ）

兵庫県では、昨今の病院経営を取り巻く厳しい環境や、高齢化の一層の進展に伴う疾病構造の変化・医療需要の増加等に的確に対応するとともに、姫路市を中心とした中播磨及び西播磨医療圏域の地域医療への更なる貢献を果たすため、兵庫県立姫路循環器病センターと製鉄記念広畑病院を統合再編し、2022 年 5 月に「兵庫県立はりま姫路総合医療センター」を開院した。民間と県立病院が再編統合される事例は全国でも珍しく、大阪府においても、医療圏地域での医療が成り立たなくなる可能性があるため、公立と民間の統合における課題等について視察を実施することとした。

併せて、同敷地内に開設された兵庫県立大学先端医療工学研究所において、最新の医療研究や、はりま姫路総合医療センターとの連携内容等について視察を行った。

また、県立淡路島公園では、兵庫県の公募にパソナグループ企画の「淡路マンガ・アニメアイランド事業」が採用され、広大な敷地に体験型アトラクションを整備した「ニジゲンノモリ」が運営されており、大阪府として、2025 年大阪・関西万博も契機にあらゆる機会・場所を通じて健康増進を進めるべく取り組んでいるため、本施設の管理運営や集客方法、利用者の健康増進等運営上気をつけていることについて、視察を実施した。

◇視察期間

令和 4 年 11 月 29 日（火）～令和 4 年 11 月 30 日（水）

◇視察参加者

中野稔子、みよしかおる、前田将臣、笹川理、魚森ゴータロー 計 5 名（随行なし）

◇視察先

《11月29日（火）》

○兵庫県庁（神戸市中央区下山手通5丁目10番1号）

《11月30日（水）》

○兵庫県立はりま姫路総合医療センター（兵庫県姫路市神屋町3丁目264番地）

○兵庫県立大学 先端医療工学研究所（兵庫県姫路市神屋町3丁目264番地

兵庫県立はりま姫路総合医療センター教育研修棟3階）

○兵庫県立淡路島公園 ニジゲンノモリ（兵庫県淡路市楠本2425番2号）

◇視察日程

○11月29日（火）

14:00 府庁本館出発（借上げジャンボタクシーで移動）

15:00 兵庫県庁着

説明・意見交換（兵庫県福祉部ユニバーサル推進課）

- ） ①「ユニバーサル社会づくりの推進に関する条例」における取組み
②農福連携に関する福祉分野での取組みと課題、今後の取組み

16:00 議場施設視察

16:30 視察終了 ※ジャンボタクシーで移動

18:30 宿泊 （ホテルモントレ姫路（兵庫県姫路市駅前町60））

○11月30日（水）

9:40 ホテルから移動

10:00 兵庫県立はりま姫路総合医療センター

） 説明・意見交換

①民間と県立病院が再編統合に至った経過

②現在の取組みと課題

③院内視察

11:45 兵庫県立大学 先端医療工学研究所

） 研究所内視察

12:10 終了・昼食

13:00 ジャンボタクシーで移動

14:15 兵庫県立淡路島公園 ニジゲンノモリ

） ①施設の管理運営、他府県等からの集客方法について

②利用者の健康増進等運営上どのようなことに気を使われているか 等

15:45 視察終了 ジャンボタクシーで移動

17:00 大阪府庁着

◇視察の内容

○兵庫県庁視察

・兵庫県福祉部ユニバーサル推進課からの説明聴取・意見交換

説明者：上田 真也 ユニバーサル推進課長

内容：「ユニバーサル社会づくりの推進に関する条例」の背景・目的や本条例における取組み、農福連携に関する福祉分野での取組みと課題、今後の取組みについて、説明聴取及び意見交換を実施。（別紙資料により説明）



（ユニバーサル推進課からの説明聴取）

質疑応答

中野議員）農福連携について、様々な障がい者施設がある中で、具体的にどのようにマッチングしているのか。

担当者）福祉・農林部門それぞれで外郭団体等に窓口になってもらっている。例えば、農業者が作業を手伝ってほしいということがあれば、農林機構に連絡してもらう。そうすると、農林機構から福祉の窓口である兵庫セルフセンターの方へ連絡を入れる。農業者の地域等により、セルフがその周辺の施設を声掛けして、興味がある福祉事業所が挙がってきたら、作業内容などを事業所と一緒に農業者に聞きに行く。その後、インターシップ事業を経て、請負契約等を行う。これが一般的な流れ。福祉事業者が農業参入したい場合は、福祉事業所からセルフ→農林機構といった逆の流れで紹介される。

毎月１回、県ユニバーサル推進課、県農業経営課、農林機構、兵庫セルフセンターの４者が集まって案件・課題など打ち合わせをしている。最近はJAから作業依頼がある。JAの協力を得れるかどうかは大きなところ。

中野議員）兵庫スウィーツ甲子園はどのようなものか。

上田課)福祉事業所が作ったお菓子をパティシエやラッピングの専門家などに見てもらい、点数をつけてもらうコンテスト。事業所で普段作っているもので、これぞという物をエントリーしてもらいプレゼンを行う。味・見た目・価格設定・原価率・ラッピング等について、専門家から具体的なアドバイスももらえる。グランプリをとった商品等は「プラスぬくもり」というインターネット販売で商品を販売してもらう。

魚森議員)議会関係で、本会議や委員会で、聴覚障がい者の方の傍聴はどういう対応をとられているのか。

担当者)基本的には、現場に手話通訳の方が待機されている。

笹川議員)ユニバーサル推進課は条例が制定されてからできた課なのか。それとも、制定前からある組織なのか。

担当者)元々は障がい者福祉課の一部。総合指針の頃から、課名はなかったが、ユニバーサル政策担当課長はいた。それが独立した。

笹川議員)ユニバーサル社会推進委員会から「条例化が望ましい」旨の中間報告があり、条例化したとのことだが、なぜ「条例化が望ましい」となったのか。

担当者)中間報告の中では、法的な根拠として、「県民・事業者・団体・行政の役割を明確化する。」「ユニバーサル社会の実現に向けた取組みの強化になる。」ことから、条例制定が望ましいという提言になっている。

笹川議員)具体的な施策の中で、インターネットを活用した「プラスぬくもり」は委託事業か。送料無料も公費負担か。

上田課)セルフセンターに800万で委託している。送料が無料となっているのも公費負担としている。厳密にいうと、送料無料は6月補正の一千万の中に入っている。

笹川議員)実績はどれくらいあるか。いつから始めたものか。

担当者)令和3年度は3,000円以上購入で無料としていた。令和4年度は補正でどの金額でも無料とした。令和3年度の送料無料分は、142件、60万円分程。商品数は約200点、60~70事業所が出展している。

一方で、コロナ禍でネット販売が増えてきて、ライバルが増えている。サイトを見てもらうため、どうたどり着いてもらうかが課題。平成25年からスタートしている。

笹川議員)県庁内でカフェをやっているようだが、どこでやっているのか。後で見させてほしい。

上田課)ドリームカフェは隣の第2号館1階でやっている。県から委託し、障がい者の職場体験事業(インターンシップ)として運営している。県庁の表玄関、入ってすぐのところでやっている。



(ドリームカフェ)

中野議員) 空き家活用の事業実施について、具体的に教えてほしい。

上田課) 空き家で障がい者就労継続支援事業所を実施する場合に、改装費や家賃(3年)を補填するもの。現在、新規は募集しておらず、継続分のみ補助している。

笹川議員) 支援学校との連携についてはどのようにしているか。

上田課) 特に「参加」の箇所が多いと思うが、支援学校の生徒が障がい者スポーツ大会に参加されたり、就労の関係ではインターンシップ事業を行っている。農福連携も支援学校の生徒を対象とした実習・体験等を行っている。農業者向けの研修も行っている。一般雇用では、清掃や介護での研修等も行っている。

笹川議員) 大阪府は支援学校の生徒数が多い中で、農業の仕事は人気がある。ただ、求人が少ないことが課題。兵庫県でも求人は足りていないのか。募集の方が多いのか。

上田課) 農福連携の取組みは、福祉事業所より農業業界の方が進んでいない印象。そもそも農福連携とは何かという農家の方もいる。もっと農業側の受け皿を広げないといけないと思っている。家族経営では、人ひとり雇うだけでも慎重。

みよし議員) 農業者と福祉事業所の間に入るコーディネーターの養成が大事だが、兵庫県の取組みは。

上田課) マッチング支援として、セルフセンターと農林機構にそれぞれ窓口をつくって、連携推進員を1人ずつ配置し相談対応をしている。地域でマッチングをする人は配置していないが、農業参入モデル事業があり、地域の人と福祉事業所とのつながりをつくる事業として行っている。地域の農業者やJA等と福祉事業所で協議会を設置して顔の見える環境をつくり、地域で農業をやっていこうという仕組みづくりをしている。

みよし議員) 障がい者アートについて、ギャラリーでの展示は販売目的ではなく、発表の場をつくっているのか。

担当者) そのとおり。販売については、福祉事業所の意見を聞いても両極であり、販売がいいと言うところと、本当に利用者が望んでいるのかというところで、販売

しないという立場の福祉事業所もあるので、県としては、まずは発表の場としている。「する・みる・支える」という３本柱の中で、「する」は発表の場の創設、「みる」は劇場等での障がい者の方への合理的配慮、「支える」は人材育成を支援している。

ただ、販売の声もあるので、今年度、初めて、芸術作品を活用した商品開発に関わる専門講師を招いたオンライン教室をしようかと考えている。

前田議員）農福連携について、農福どちらにも窓口を設けており、一本化していない。専門性等、それぞれに置くメリットが大きいからだと思うが、そのメリットはどのようなものか。

府では農福連携を工賃向上の中で、外部団体に委託して事業をしており、兵庫県のセルフセンターと仕組みは同じかと思うが、社協との連携はどうなっているのか。県社協と市社協の連携等具体的な内容があれば教えてほしい。

上田課）セルフセンターは福祉事業所の集まりから発生した団体なので、各事業所とのつながりが強く、事業所のことも分かっていて、事業所も相談しやすい団体。農業と福祉、どちらかしか知らないような窓口であれば、繋がらないので、業界に詳しいところがそれぞれ窓口をもって、つなげていく方がよいという判断。

担当者）セルフセンターは受注窓口となっており、県内全ての福祉事業所とつながりがあるため、社協に頼まなくとも、例えば農作業依頼が来た時に、そのエリアの福祉事業所に受注できるかどうか投げれる体制になっている。そのため、そこまで社協と連携することはない。

事業をしていて思うのは、農業者は福祉のことがわからないし、福祉も農業のことがわからない。わからないものがどちらかに直接行っても、最初はあまり話にのってもらえない。やはり、農業者は、農林機構やJAからの話であればやってみようとなる。また、理解のある若手の農業者の方々は色々とチャレンジしてみようとしてくれるので、その方と連携していくのが一つかと思う。

笹川議員）福祉のまちづくり研究所の指定管理は開発研究も含めてか。昔からあるのか。

上田課）全て指定管理。この名前にかわったのは平成４年、５年ごろから。

担当者）昔はハード面を主にしていたが、今は最先端のロボットを使ったりリハビリテーションをしている。病院や高齢者施設と隣接しており、臨床の研究フィールドもある。

課題としては、研究開発をした先に、それを利用する対象者が少ないところ。研究としてはニッチなものになるので、商品化や商業ベースになかなかのってこないところが課題。小児筋電義手バンクというものをしており、研究開発のための寄付金を集めて、それを原資に小児筋電義手の作成や貸出しを全国の小児が来られてサービスを提供している。スポーツの施設も敷地内にあるので、スポーツ医学の面もある。

・議会施設視察

説明者：兵庫県議会事務局 議事課 近藤 健一 議事班長

山下 貴史 委員会・記録班長

内容：議場、委員会室等を視察し、府議会より優れている事項や相違事項を今後の議会改革の参考とする。

（議場）

県議会が最初に関かれたのは 1879 年。現在の議場棟は 3 代目で 1971 年に完成した。現在議員は 79 名。議場裏には机・椅子がいくつか設置された打ち合わせスペースがあり、壁には 120 人を超える歴代議場の写真が並んでいる。

（議場の特徴）

緊急時対応として議場の天井の一部は、すりガラスになっており、停電でも太陽光がさしこみ足元が見える明るさがあり、落ち着いて避難できるようになっている。議場の全ての席には、防災ヘルメットを常備。感染症対策でアクリル板も設置されている。

また、本会議を傍聴するための場所には、だれでも座れる「一般傍聴席」や、車いすのまま入ることができる「車いす用傍聴スペース」、泣いてしまうかもしれない赤ちゃんと一緒に入ることができるように防音ガラスがはめ込まれていてベビーベッドのある「親子傍聴席」、高齢者や体が不自由な人が利用できる「優先座席」などがある。本会議場の傍聴席では、事前に申し出があれば、手話通訳の手配や磁気ループの設置、補聴イヤホンの貸出を行っている。

議場にはカメラが 5 台設置されており、インターネットにより本会議や委員会を中継している。また、本会議のインターネット中継・録画配信に手話通訳を導入している。

毎年 2 月定例議会開会前に議場コンサートを開催。

コロナ禍で議場見学ができなくなったことから、議場見学の雰囲気味わえるような動画を作成し、インターネット上で公開している。



（議場写真）



(親子傍聴席)



(委員会室)

○兵庫県立はりま姫路総合医療センター

説明者：木下 芳一 院長

内容：民間と県立病院が再編統合に至った経過や、現在の取組みと課題について、別紙により説明聴取・意見交換を実施し、併せて院内視察を行った。



(はりま姫路総合医療センターにて意見聴取と意見交換)

質疑応答

魚森議員：民間と公立が合併するにあたっての報酬について、クランクや放射線技師等医師以外の医療従事者の報酬差分をどうやって埋めていくのか。今苦労されているとのことだったので、そのあたりをもう少し詳しく教えてほしい。

また、立ち上がってまだ半年だが、他府県からの救急患者の受け入れ体制について。もう一つ、優秀な人材を集めるために公的資金だけでは足りないと思うので、外部研究の資金調達の努力などどうとっているのか。

超電導と永久磁石いろいろあると思うが、現在、この施設ではこういった装置が入っているか。

木下院長：MRI については、超電導の機器はない。全て 1.5 テスラ以上で、3 テスラが 2 台と 1.5 テスラが 1 台で稼働している。永久磁石は小さな病院で様々な制限があるところで使用する等、特殊な用途で使用されているかと思う。術中での使用については、MRI を装備したハイブリット手術室を用意している。ただ、MRI を購入できなかったのが、現在は普通の手術室として使用している。CT ハイブリットは稼働している。

外部資金について、病院で働いている医師の中で診療科長に就いている医師はだいたい大学での教員経験がある。教員経験があるため、文部科学研究費を申請した経験があるため、ある程度のサポートがあればできる。若い医

師は申請経験がないので、県立大学の方で研究費を申請する際のコツをレクチャーしてもらった。研究費の取得は研究を行う第一段階なので、何とか頑張ってもらいたいと思っている。

県外からの患者さんの救急搬送について、ドクターヘリ事業を受けており、週二回駐機しているため、ヘリで患者搬送されることがあるが、こちらに搬送されてくる方はだいたい兵庫県内。神戸市から搬送される方もいるが、岡山から搬送される方は今のところいない。おそらく、ヘリの守備範囲として、岡山に入ると岡山大学附属病院等大きな病院があるので、そちらに搬送され、役割分担されているのではないかと思う。

給料体系について、広畑病院の給料体系は、勤務が長くなれば多くなっていく形だったが、県立病院の給料体系は違った。若手医師を比べた時には、県立病院の方が高い給料だった。長く広畑病院に努めておられた医師（現在管理職になっている医師）は、かなり高い給料だったが、現在はだいぶ減っている。ただ、いい病院をつくろうと頑張っておられた方ばかりだったため、しっかり説明するとあまり大きなクレームはなかった。

魚森議員：合併するにあたって、リストラが発生したか。

木下院長：統合については、広畑病院は３年前から、循環器病センターは２年前からそれぞれの病院長は知っていた。広畑病院は、それぞれの医師を見て、新病院には不向きだと思われる方は３年間の間に何人か辞めていただいた。循環器病センターは大学から来ていただいている医師がほとんどだったため、大学と相談の上、少しずつ医師の交代をしていただいた。

医師以外の方については、広畑病院の方は事務の方も含めて減給補償がされている。したがって、広畑病院でもらっていた給料をそのまま新病院でももらえているが、ただし、県の給料形態で号給が上がるまで、一生懸命働いてもその給料のままだがずっと続く形となる。逆に、センターの方は、同様に働いても広畑病院の方に比べて給料が少ない方がおられるのは事実。少しずつ解消していく必要があるが、難しい問題点。

中野議員：BNCT といったものを導入される予定はあるか。

木下院長：現在、放射線治療については、外部照射でリニアックを２つ入れており、１つ目は開院から少して稼働することが可能となっている。リニアックを稼働させるには線量等法的な手続きがかなり難しい。２台目はこの１２月から稼働できるようになっている。そちらはIMRTという、それぞれの場所に必要な線量だけをコンピューターで細かく整理をして、線量をあてるといった特別な治療ができるようなリニアック。通常グリットが５ミリぐらいで調整するが３ミリの装置が入っており、かなり細かい治療が可能になっている。

また、県立病院１３病院の間でネットワークをつくっており、近くの粒子線センターとも連携体制をとっている。

中野議員：外国人観光都市ということもあって、国際診療センターも考えておられるが、医療ツーリズムについて、大阪ではあまり進められていないが、姫路ではいかがか。

木下院長：医療ツーリズムは難しいかと思う。海外、特にアジアの方で、日本観光と共に人間ドックを中心とした健康チェックをしていただくため、中国や東南アジアの国から来ていただこうと考えていたが、それは日本医療のレベルが、中国や韓国より高いと思っているから可能なわけで、10年前は高かったが、今は中国や韓国にはるかに抜かれている状況と考える。

諸外国のレベルが高いため、日本に來られて検診を受ける必要性が感じられないということで、そもそも成立しないと考えている。中国より価格を下げて、価格競争に持ち込めば可能性はあるが。

中野議員：がん治療について、日本は少し先進しているのか。

木下院長：日本では、外科系の医師がNCD（National Clinical Database）という手術をされた患者を全て登録して予後を調べたりすることができるような状態をつくろうとされて、海外の成績と比較するようなことができるようになっている。日本の外科医師の手術技術は海外と純粹に比べると、海外に勝っている。胃や大腸など腹部の手術は海外にかなり勝っているところもあると思う。手術の結果を比べるとそうなるが、何を持ってがんの治療成功というか、というところ。

島根大学のグループが、80歳以上の方でも安全に胃がんを内視鏡で治療できるというデータをまとめた。がん再発もほとんどなかった。しかし、もう少し調べ、手術後、何年後に死亡されたかを確認すると、脳卒中や心臓の病気で2、5年後に死亡している。2、5年であれば、早期がんは放置していても何も起こらない。技術レベルで見るととても高いが、全体として、患者さんの幸せ、QOLにどれだけ繋がったのか。早期がんを見つけたために、治療・入院も必要になり、費用もかかる。がんの不安ももつ。経過を見る必要がある。それが本当に幸せだったのかと。

つまり、日本のがん治療はレベルが高いか？という質問に対しては、プライマリーポイントをどこにもってきて、何を評価するかという件で変わってくるというのが、正しい答えになるかと思う。

外科の医師の内視鏡等技術レベルはかなり高いと思うが、全体として本当に幸せな状態をつくっているのかというところは、しっかり議論しないといけない。

中野議員：小児科医が0.5人となっているが、小児科は今どういった状況か。小児治療について教えてほしい。

木下院長：姫路地域では、周産期を含めた小児診療は日赤病院が全て診るというのが基本的な形。日赤病院では新生児用の救急車も持っており、小児科も非常に大きなグループで姫路地域全体を診ることになっている。はりま姫路総

合医療センターでは、協力体制を敷くということで、小児科医師は現在 3 名在籍しており、それぞれ月・水・金に 1 回ずつ当直している。火・木・土がないので、当直 0、5 人と記載している。R5 の春から 4 名から 5 名になる予定。

小児科医がいないときに子どもが診療に来られると、内因性の疾患であれば日赤病院と連携を取りながら対応をしている。

笹川議員：県立と民間病院統合について、大阪府でも医療が成り立っていない地域がこれから出てくる中で、全国的にも広がっていくのではと思う。その中で最大の課題として、職員同士の心理的壁と働き方だと思う。今後、どのように職員の心理的壁をなくしていこうと思っているのか。また、元々の病院の文化をどう融合させていくのか。

木下院長：壁があると感じる職員と、そう感じていない職員がいると思う。医師に関しては、元々大学で同じ研究室だったり、昔同じ病院で働いていた等、元々病院間でも人材交流を行っていたので、そこまで壁は感じられない。

一方、転勤があまりないグループ、事務の方などは仕事の仕方やスタイルの違いで、難しいことはあると思う。当初はそのことで困っていた方々もいたが、だんだん慣れてきてそれなりのところに落ち着いたかと思う。普段の仕事の中で、一緒に患者さんに対応していく中で、また、研修と一緒に受講する中で、少しずつまじり合っていくもの。

最も難しいのは看護のように思う。しかし、実は一番よく人事交流しているが、違ったシステムで仕事を行っていた方なので、まじりあうのは時間がかかると思う。そのあたりは、良くまじりあっている医師集団と一緒に仕事をする中で少しずつ解消してくるかと思う。

看護部長：人の交流はうまくいっているが、稼働がすごく忙しい。医師は今まで行っていた専門診療を、場所を変えてする形になるが、看護は様々な診療に行くため、慣れていない、経験していない診療もある。さらに物品の場所がどこにあるかなど、細かいところも含め大変なところがある。

笹川議員：よく病院統合では、両方の病院の経営が悪いから統合するということを聞くが、はりま姫路総合医療センターではそういうわけではないのか。

木下院長：どちらも悪かった。広畑病院も新棟を建てて、その支払いが残っており、経営の負担になっていた。循環器医療センターも一般会計から繰入金を入れてプラスになっていたが、年々プラス幅が小さくなり、最後は赤字だった。やはり両方の病院は問題点を抱えていた。

両方の病院とも一生懸命しても問題点を抱えることとなった。救急に対応する保険点数がもう少し上がってれば、また、普段の診療でも QOL 改善のための医療についての保険点数が少し上がってれば、そちらに誘導されてプラスになる。自由競争ではなく、完全にコントロール下の運用をしているため、国が少しさげれば赤字になるし、少しあげれば黒字にな

る。病院経営の中で、どこが診療が黒字で、どこが診療が赤字でということとはコンサルタントに言われなくてもよく分かっている。ただ、赤字の診療をやめるなんてことはできない。そういう中での経営となっている。



(はりま姫路総合医療センター木下院長と)

○兵庫県立大学先端医療工学研究所

説明者：藤田 孝之 副所長

内容：先端医療工学研究所内を視察しながら、取り組み内容の説明を受けた。

(生体計測室)

電波が入らない部屋で非常に微弱な脳波をとる等の研究もできる。学生が実験等を行っている部屋。コンピューターを使って脳画像を取ったりしている。利用者には海外からの留学生もいる。

(バイオ系実験室)

理学の先生が使われている部屋。バイオ用の実験ができるようにと、バイオハザードの設備だったりがある。研究されている先生が神戸市のメドテックグランプリ KOBE2022「最優秀賞」を受賞された。細胞にマーキングをするための小さなデバイスをつくる研究をされている。

(イノベーションサロン)

病院とのやり取りの場として利用している。現場で働いておられる看護師や放射線技師等の技師が困っていることを、工学・情報系の大学の人間が情報を集積してお手伝いできるよう、サロンという形で、リラックスした雰囲気話しながら、技術相談を受ける場となっている。

（研究室・個別研究室等）

研究所に所属している学生だけでなく、他の様々な学部 of 学生も勉強したり、研究したり使える場所。パーティションで区切り、フリーアクセスで使える。

隣に個別の研究室が並んでおり、機密性の高い研究を行う場合に使用する。色んな情報を扱うため、専用のサーバー室もあり、高速なコンピューターや光通信が入っている。

（オープンスペース）

色んな研究グループが一つの部屋で研究をやっている。右手が工学系・機械系で、左手が栄養系でベッドを設置している。

3Dプリンターがあり、やわらかいシリコンもプリントできるため、血管のモデル等を作れる。手術中に一時的に動かす人工心臓の中の人工弁をどのように設計すれば、効率よく、負担少なく作れるか研究しているグループ等が利用している。また、複雑な血管形状をプリンターで作り、医者のカテーテル研修に使うなどしようとしている。基本的にどんな形でも作れるので、複雑な臓器のモデルも今後作っていけるよう進めている。

また、流体の研究をされている先生が、コロナの関係でマスクの周りの気体の流れを可視化して計測する研究をしている。



（先端医療工学研究所視察）

○兵庫県立淡路島公園 ニジゲンノモリ

説明者：貞松 宏茂 代表取締役社長

内容：施設内を見学しながら、施設の管理運営、他府県等からの集客方法、利用者の健康増進等運営上気をつけていること等について説明聴取。

（内容）

兵庫県が公募した「兵庫県立淡路島公園における民間事業の企画提案」に、パソナグループ企画の「淡路マンガ・アニメアイランド事業」が採用され、オープンした。自然のまま残された淡路島公園を活かした企画で、淡路島に新たな観光客の誘致、地域を活性化するための事業として、パソナグループと兵庫県が一体となって事業を進める。パソナグループは、子会社「株式会社ニジゲンノモリ」を設立し、現状の自然を活用して整備。アトラクションなどの投資額は抑え、費用はあまりかけない施設として展開している。

野外環境を最大限に活用した、昼夜 2 つの表情をもったパーク。昼間は自然の中でおもいきり体を動かし、時には絶叫もありのアトラクションがオープン。指定管理は 10 年間となっているが、契約者双方問題がなければ延長になる。夜は最新テクノロジーと新しい表現手法により、二次元世界を美しく幻想的な演出をする。広大な野外だから実現できることを実施している。



（ニジゲンノモリ視察）

（宿泊施設）

園内には、コクーンと呼ばれる客室が 23 棟ある。コクーンは日本語で「繭」。「まるで繭のなかにいるような心地良い時間に」と、見た目にも可愛い造りになっている。お風呂が不安という方もこの施設であれば、1 棟ごとに独立した造りで全室風呂つき。また、全室に天窓がついているため、部屋の中から星空が楽しむことができる。コロナ禍でワーケーション利用も増えている。日本のキャラクターが出迎えるキャラクターコラボルームも

整備しており、海外からの観光客も多く来ている。

また、過去にはグランピング施設を活用し、自然の中でヨガや自己整体レッスン等のアクティビティを体験しながら、漢方食材を豊富に取り入れた栄養化の高い食事を摂取できるといった、参加者の健康増進に則したプランをつくるなど実施した。

（アトラクション等による集客）

クールジャパンコンテンツ×体験ができることが特徴。海外のものと混ぜるのではなく、日本のもののみにコンテンツを揃えている。さらに、基本的に30年以上続いているものを一つの目安とし、親子で楽しめるよう工夫している。各アトラクションによって違うが、1つにつき概ね1時間～2時間遊べる。また、3か月に1度アトラクション内のコンテンツを変えており、各制作会社の物や素人の方が作成したジオラマ等を借りて展示等もしている。

園内は写真スポットも数多く用意しており、SNSでアップしていただけるようにしている。従来、公園の利用は半日があればいいようなものだったが、トラムカーや食事ができる場所を設置することで、平均で7時間に園内滞在してもらえるようになった。

また、公園内のほぼ使われることのない通りにボックスを用意して、今流行のアニメに絡めた謎解きを行ってスタンプを押していき、全て揃うと絵が完成するようなコンテンツもつくった。謎解きはアニメを知っている人も知らない人も楽しめるよう内容を工夫している。さらに、QRコードを読み取ることによって、公園内でどのような花が採れるのかわかるようにしている。そうすることで、たくさんの方に園内を歩いていただき、健康増進や県立淡路島公園の魅力をさらに知ってもらえるようにしている。



（園内を回りながら説明聴取）

以 上